

## 無我の仰信

「親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおおせをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり。念仏はまことに浄土にうまるとたねにてやはんべるらん、また地獄におつべき業にてやはんべるらん。総じてもつて存知せざるなり。」

## 愚禿の生命

親鸞聖人は、はるばる関東からたづねて来た真剣なる同行に向かつて、「しかるに念仏より外に往生の道をも存知し、法文などをも知っているだろうと、もの足りなく思うなればそれは大きなあやまりである。もしむずかしい学問沙汰などがほしければ、叡山あるいは南都にゆくならば、賢い学者等も多くいらせられることであるから、そのお方々をも訪ねて往生の要、よくよくきかるべきである。」と仰せられました。

まことに念仏は愚禿の生命である。追従もなければ、御機嫌とりもない。もしこの時、聖人が野心家であったり、金剛の信心がなく、確固不動の生活者でなかったり、あるいは我をつつて自己の勢力でも張りたい方であるならば、聖人は決してかくの如き冷かに見ゆる態度はとられなかったであろう。奥ゆかしい法門はここにあるぞ、日蓮が何と言おうと、善鸞が何とかき乱そうと、俺の信念が正しいのだ、俺の学問が深いぞ、よく来た〜、他の誰の所にも行く必要はない、他はみな迷えるものだ、異安心だ、大したことはないのだ、そもそも我が師法然上人一流の……等々と、お大徳たちのように申されたに違いありません。

しかし、さような言動の見える時、その人は如来と共なる人ではない。如来をさしおいて我を主張する人であります。如来よりおくれ遠ざかって、如何にして如来と一体に融合しようかとはからう人も、如来より遠い気の毒な人であるが、いつしかに如来を得たり顔になつて、凡夫の我を言い張る人もまた、無生命な殻にたてこもつた哀れな人であります。

愚禿とは如来と共なる者の自覚であります。「弥陀の五劫思惟の願をよく〜案ずればひとへに親鸞一人がためなりけり。」如来の大慈悲と愚禿との間には、兎の毛一本も、紙一面も、さしはさむことの出来ない。内観される悪人愚者、いかんともしかたのない愚禿は、そのまま広い広い絶対自由の大信海に生かされているのであります。愚禿とは如来と共なる者の自覚でありました。「念仏より外に」愚禿の生命はないのであります。今さらに次の節に移します時、聖人のみ言葉はいよく〜冴え渡つて来ます。この一節、まず幾度も味読すべきであります。

「親鸞におきては

たゞ念仏して

弥陀にたすけられまいらすべしと

よき人のおほせをかうぶりて

信ずるほかに別の子細なきなり。

念仏はまことに浄土に生るるたねにてやはんべらん  
また地獄におつべき業にてやはんべるらん  
総じてもて存知せざるなり。」

以上すべて金玉の文字であります。一字一句加減することを許されません。以下静かに聖人の信境を味わってゆきます。

親鸞におきては

聖人は決して単なる説教者ではない。全身全霊をもつて念仏の一道を生きる生活者でありました。

もし求道を忘れ、自己を失い、ただ説教する人になりおわれれば、すでに残るものはただ傲慢である。自ら説く前に自ら聞かねばならない。もし説くことが許されるならば、それはただ自らの喪心の声の告白でなければならぬ。自らの衷心の声である時だけ、人に迫まる何ものかがある。俳優は泣く、そうして笑う。もし宗教家が、我にない、私の衷心の声でないものを、言葉の技巧で上手に語って行けるようになる時、悲しくも道化役者になったのである。

「親鸞におきては………」 私たちはここに「おまえたちは」と言われなくて、どこまでも自らを告白せられる聖人に出会います。念仏は血と涙とによつて開かれた、親鸞の生きる、たつた一つの生命道であつた。本質的には、釈尊の仏教は釈尊のものであり、法然上人の念仏は法然上人のものである。それがやがて自分のものになり2きつて、千万人といえども我はゆく。

「それ真実の教を顕わさば、大無量寿経これなり。」

如来の本願と名号とは、ついに愚禿を根本的に更生せしむる力であり光であつた。念仏は万人の道であるよりも先に愚禿親鸞の道でありました。

信ずるとは

「親鸞におきては、たゞ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしとよきひとのおほせをかうぶりにて信ずるほかに別の子細なきなり………」

「親鸞におきては」………「たゞ念仏して」とありますが、「たゞ」は唯であります。只でも徒でもありません。『唯信抄文意』に「唯は、たゞこのことひとつという。二つならぶことを嫌ふ語なり。また『唯』はひとりという意なり。」とあります。つまり唯一という意であります。そのたゞは、「念仏して」と「信ずる」との両方にかかるのであります。唯信、唯行、信も行も南無阿彌陀仏一つで足りること。弥陀の本願を信じて念仏する、それだけで救われる。他に信ずる相も、行ずる行もないことでもあります。

よき人とは善知識のことで、聖人にとつては、広く七高僧をさし、近くは法然上人のことでもあります。ここに、親鸞、念仏、弥陀、よき人、おほせ、こうむる、信心、等の信仰確立の要素が、ただ一句の中に盛られて、しかも、一点の疑義なく表明され、統一されてあります。

まず「弥陀にたすけられまいらすべしとよき人のおほせをかうぶりて信ずる……」のみ言葉から味わいます。「おほせ」とは「教え」のことであり、「こうぶりて」とは「聞いて」であります。この一句は大無量寿経下巻、本願成就文から出ております。「諸有衆生、其の名号を聞きて、信心歓喜し、乃至一念せん。至心に廻向したまへり、彼の国に生れんと願すれば、即ち往生を得、不退転に住せん。……」聞其名号、信心歓喜、聞くというのは名号の内容を聞くこと、即ち本願を聞くことであります。如来を聞くことでもあります。その如来の本願を聞くということが、そのまま信心歓喜であります。即ち、聞即信であります。そこを「おほせをかうぶりて信ずる。」と言われたのであります。

ある時、浅右衛門が、三河の中窪の長松の所を訪ねて言うのには「御文章を拝読すると『弥陀の本願を信ぜずしては、ふつと助かるということあるべからず。』とあるがいつたい信ずるとは如何なることか、どうぞ信ずるということを聞かしてくれ。」とたのみました。すると長松が言うには、「後生の一大事は親様におまかせするとまでは聞いたが、信ずるとは頂いていない。それは俺にもわからない。これからちよつと聞いて来る。」とて長松は庭に下りて草鞋わらじをはきはじめました。浅右衛門はあきれて、「そんなに急なことをしなくてもよい。序のあつた時、聞いておいて下され。」「ひとから不審を尋ねられて、それを知らぬとてほつておかれるものか。一大事だからこれからすぐ上京致します。」とて行こうとするので、浅右衛門も気の毒に思い「それなら路銀を差し上げよう」と言つたが「俺に用意もある」とて出発してしまつた。

三河から三日三晩かかつて道を急いで京都につきました。上京するとすぐ、香月院和上のお住まいを訪れてお目にかかり、「私の所へ浅右衛門がまいりまして、御文章の中に『弥陀の本願を信ぜずしてはふつとたすかるということあるべからず』とあるが、信ずるということについて聞かせよと申します。この長松は後生の一大事は親様におまかせするとまでは頂いていますが、まだ信ずるとまでは頂きませぬ。信ずるとはどうすることで御座いますか、一言お聞かせにあづかりたくてわざわざ参りました。」と申上げると、

香月院はしばらく考えていられたが、やがて「それは御苦勞であつた。それは大切なことであるから、明日は講釈をやめて、講者一同立合の上で一応取調べて聞かしてやろう。しばらく休んでおれ。」との仰せでありました。そこで宿に下つて待つていきますと、翌日学寮から使が来て、「調べがついたから来い。」とのことでありました。

長松がさつそく出かけて見ると、学者講師のおレキ／＼の列席された中へ呼び出されました。香月院の和上は長松に「昨日不審のおもむき、今いちおう申し上げられよ。」

といわれたので、長松は重ねて「弥陀の本願におまかせするとまでは頂いていますが、信ずるとまでは頂きません。信ずるとはいかなることとございますか。」と申し述べると、香月院様は、講師方を顧み、末座の五乗院にむかつて、「五乗院、その方かわつて授けられよ」との仰せである。

そこで五乗院は進み出で、長松にむかつて「長松、その信ずるとは、仏祖善知識の仰せに順うことであるぞ。」といい渡された。さすがは長松である。たゞちに問い返した。「その仏祖善知識の仰せとは、如何なる仰せでございますか。」すると五乗院は「長松、弥陀の本願は、何ほど欲が起ろうと、何ほど瞋恚の炎が燃えようと、機のささいえば鬼でも蛇でも、そのまま救うの仰せじゃぞよ。」とのお言葉に、長松は「さような仰せでござりまするか。それならば信じられます。信ぜられます。」とて、すぐ歡び／＼三日三晩かかつて三河へかえり、浅右衛門にこの由を伝えました。

香月院講師等の長松に対するお答は、「親鸞におきてはたゞ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしとよき人のおほせをかうぶりて信ずるほかに別の仔細なきなり。」との聖人のみ言葉と完全に一致いたしております。

「よき人」とは仏祖善知識のことである。善知識は法に生き、法を説く人でありま

す。

「信ずる」とは、仏祖善知識の仰せを信ずること。

「仏祖善知識の仰せ」とは、如何なる悪人をも救うところの如来の勅命そのものである。ここに救主と教主とがはつきりしています。救う方はどこまでも如来であります。しかし救主だけでは救いは成り立ちませぬ。そこに必ずなくてはならぬものは教えを説いて下さる善知識であります。教えを説いて下さる人なくしては救いはない。けれども善知識は善知識であつて救主ではありません。

親鸞聖人には法然上人のみ教え一つが生きたのであります。法然上人を通して久遠の親である弥陀の大悲の真髓に触れられ、千古の疑團が氷解したのであります。

我らもまた信じ得る善知識を通して、はじめて無我の信仰生活に入ることが出来ま

す。言いかえると、信仰は生きた人格と人格の接触であります。善知識は灰色な独りぼつちな寂しき大地に見出されたる唯一人者であります。「父」であります。生命の交流に於いて見出された、切るに切られぬ真実の師であります。

### 無我の態度

「よき人のおほせをかうぶりて信ずる外に別の子細なきなり。念仏はまことに浄土に生るるたねにてやはんべらん。また地獄におつべき業にてやはんべらん、総じててもて存知せざるなり。」

この一節、極めて大胆なる告白であり、断言であります。そこに光っているものは、ただ「よき人のおほせ」であります。聖人にとって法然上人の存在は絶対的なものであります。大法は如来のものであり、教えは師匠の金言である。聖人が師の上に一切の光榮を奉つて「よき人のおほせをかうぶりて信ずる外に別の子細なきなり。」と限りなき無我的態度をおとりになつたことこそ聖人の真面目であります。

関東の同行たちは、日蓮上人の「念仏は無間地獄の業である！」との折伏に惑うたものであります。この日蓮の折伏に対して聖人は「念仏は往生極樂の行業である！」と言ひ張らないで、「念仏はまことに浄土に生まるるたねにてやはんべらん。また地獄におつべき業にてやはんべらん、総じててもて存知せざるなり。」と告白せられま

した。それはおそらく信仰の極致の味であり、信じて疑わぬ者の赤裸々な姿でありましょう。

四箇格言の折伏の太刀風すさまじく、関東の野に大獅子吼して、「我は法華の行者日蓮である。地涌の上行菩薩とは我である。我は日本の柱である。迫害も流罪も何のその、日蓮の首にたつ剣があるならばお目にかかろう………」といったような破邪の偉聖が日蓮であるならば、自ら愚禿と名告り、地獄一定とひれ伏し、師教の前に絶対随順して「念仏はまことに浄土にうまるるたねにてやはんべらん………」とて浄土、地獄のはからいすら棄てて、謙虚に大法の前に合掌帰命するは愚禿親鸞の真面目である。

破邪に勇む日蓮の刃も、大悲に安住して地獄をも意とせざる聖人には立つべき余地もあり得ない。至心、信樂、欲生と鍛え上げられた、利劍即是弥陀名号、六字の宝刀は、念仏の人と一体である。どうして小ぎかしい人間の論理が役立つ。

「親鸞におきては、たゞ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおほせをかうぶりで、信ずるほかに別の子細なきなり。」

何たる自信に満ちた言葉であろう。金剛不壊の愚禿の信境、全我を願力に投托して、大悲に安住する者の権威であります。

### 眞実信

「極樂はたのしむと聞いて、参らんと願ひのぞむ人は仏にならず、弥陀をたのむ人は仏になると仰せられ候。」（蓮如上人御一代聞書）

これは、蓮如上人によつてなされた鋭い批判であります。凡夫の我執は常に功利主義の心となつて動きます。聖人はこれを「罪福」信ずる心と言われました。万人の福をかえり見ないで、己一人幸福を得ようとする心であります。大地のあらん限り、人間はこの「我」の態度によつて鬭争をくり返し、暗の世界を綴つてゆく。

この功利心は祈願請求の心となつて神仏に向かつて動きます。一番低級なところでは、病氣全快、商売繁昌、家内安全、戦勝祈願、等々のために雑多な神々を祭ります。これらはみな人間の心の中におこる欲心を、神や仏の中に求むる心で、さらに人格的な自覚のためには何ものも持つていませぬ。

もしその心が阿弥陀仏の上に持つて来られると、自分の頭の中に地獄と極樂を描いて、その地獄を恐れるのあまり、どうしたら地獄をはなれて極樂に参り、尽きせぬ樂がせられるであろうかというような、苦悩の逃避としての、極樂ならぬ、欲樂を求めて如来を信じようとしています。そうした人に向かつて蓮如上人は大鉄槌を下して「極樂は樂しむと聞いて参らんと願ひのぞむ人は仏にならず。」と仰せられたのであります。しかし、死んで極樂に行きたいなどと考えているのは老人である。我ら若い者はそんなことは考えない、と言うかも知れませぬ。

さる所で一人の若い方が言います。

「先生、どうしたら私自身がわかるのでしようか。」

「自分を知つて何にしますか。」

「自分自身の相がわかつたら、如来がわかろうかと思ひます。」

「如来がわかつたらどうなります。どうなりたいのです。」

「そりゃ、もつと安楽な生活が出来ようと思えます。」

「何！楽な日暮し？ あなたは楽がしたいのですか。」

とこんな問答をしたことがあります。

楽がしたい、いい衣裳がつけたい、甘味しいものが食いたい、働くのが嫌い、ぶらりしやらりと遊んでいたい、というような者が集つたのでは、一家の中だつて治まりはしません。どんな苦勞でもする、毒責め火ぜめ、辛苦なことなら自らひき受ける、つまらぬ根性を清算して大地に下り立つて生きる者が集つてのみ、そこに美しい人間の世界が出来るではないか。如来の前に、とどのつまりは、己一人が楽がしたいという根性を根底にして、聞くの信ずるのと言つたところで、それは結局如来を弄んでいるのです、と言つたことであります。

もちろん今の方のは精神的な苦しみであつて無理もありませんが、しかし我らはどうしても、初めは人生の苦惱に目覚めて求道を始め、不純なる功利的な心を満足しようとおせります。それが段々と深い世界に転入して純粹無雑な大信海に摂取されるのであります。

「弥陀をたのむものは仏になる……………」

極楽にまいろう、安楽になろうとはからうことと、弥陀をたのむこととは、根本的な差があります。真に弥陀をたのんだ信のすがたこそ、

「念仏はまことに浄土に生るるたねにてやはんべらん。また地獄におつべき業にてやはんべらん。総じてもて存知せざるなり。」

と仰せられた相であらねばなりません。この信境こそ、一切の功利心がとれた無我の仰信であります。如来の願心のみ生きて、凡夫迷情のはからいの自力の手をひっこめた相であります。

私の心の中に、地獄か浄土かを思いかためて、その自力建立の信の上に如来を引つ張つて来るのではなくて、法蔵の願心の中にこそ、一切を超えて浄土への白道が内在されてあります。二つのものを解決しておいて如来を信ずるのではなくて、信ずることによつて一切が解決するのであります。

真実の信樂は、祈願請求の心ではなくて、満された心であります。微塵も凡夫より如来へ求むる心ではなくて、如来の生命を完全に恵まれて生きる感謝の世界であります。欲の手を神に差し出すのではなくて、お慈悲の前に合掌の手を合するのであります。合掌することによつて、なおも欲心をつのろうというのでなくて、如来の智慧光によつて自覚した相であり、満足し懺悔しつつ、真実の彼岸に向つて第一歩を旅立つた、大地に真実に生きる者の相であります。

信心の異名である信樂という言葉は、第十八願絶対他力の信を表わされたる言葉であります。信心という言葉は一切の宗教がことごとく用いますが、信樂という言葉は断じて不純分の雜つた自力の迷信に使うことを許されません。信樂とは全く仏心そのものの開顯であります。

信巻の信樂釈に、聖人は、

「次に信樂というは則ち是れ如来の満足大悲円融無碍の信心海なり。この故に疑蓋  
間雜あることなし。かるが故に信樂と名く。」

と仰せられた。則ち信樂とは、「如来の……信心海」であります。如来の信心海の内容を具体的に言えば「満足、大悲、円融、無碍」であります。如来心、すでに満足の信心海であります。この如来心の満足がそのまま私の満足であります。南無阿弥陀仏とは、如来と我との人格的絶対価値の満足せる相であります。真実によつて満された心であり、生きることに對する歡喜賀慶の心であります。この大信こそ、大悲そのままの信心海の体得であり、絶対価値の円融まじりかな全一の世界であり、一切の煩惱に碍げられぬ無碍の光明であります。

何で功利心をさしはさむ隙がありませんか。「念仏はまことに浄土に生るゝたねにてやはんべらん、また地獄におつべき業にてやはんべるらん」総じてもて、露ほども、はからうことの必要なき絶対自由の境地であります。

まことの前に

聖人は信樂の字訓釈において、信樂とは「真実誠満の心なり」と言われました。

如来は我ならぬものである。信ずるとは、我ならぬ者の声を聞くことである。いたずらなる内觀にどうして本格的な自覚がありませんか。如来とは絶対に我ならぬものであり、しかも我に向かつて絶対の權威をもつて君臨し、徹底的に我を清算否定する高次の実在であります。彼は永遠に絶対に我ならぬものとして超越しつつも、来たつて我の人格内容に充滿し、招喚して、我を不断に彼に歸命せしめます。

かかる不可思議の信の世界においては、如来は大愛であり、一点濁りなき真実である。信樂とは、かくして、真実誠満の心であります。かるが故に、如来は限りなく我を目覚めざまして招喚し得るのである。真実に通うものは真実である。信が凡夫の無明煩惱の心でなくて、如来廻向の南無の心であるとの聖人の鮮かなる体験を感佩かんぱいせずにはいられません。信樂とは、単なる觀念の世界に、善悪、賢愚、淨穢等の相対価値に囚われて、いたずらに悪に泣き、あるいは善に高上りする我の内容ではなくて、善悪を超えたる彼岸の如来真実心の全体であります。

久遠の故郷たる涅槃界を後にして、いたずらにさ迷える流転の子は、重き疑惑の鉄扉をおろして限りなき反逆を真理の殿堂に加えつつ、悪道に苦しむ者であります。如来の本願は、如来の久遠の親心の顕現であり、さ迷える子の上に届く大慈悲である。まことに不可思議の「信」はこの如来心より生れるのである。この我ならぬ絶対真実の前に、善悪を云々する無自覚があり得るだろうか。

親鸞聖人のように、自ら省みることに忠実である者だけ、やがて真実の教えの前に合掌し、真実の如来の招喚を聞くのであります。真実の教えの前はどうして醜き我をおし通すことが出来よう。私どもが私自身に忠実である限り、その忠実なる歩みの相として、尊き人のみ教えのままに精進する人となるであります。よき知識ちかひを持たぬことは道義的病の重患である。しかして尊き人の教えこそ、私たちの眠りを根底か

らさますであろう。私どもが自らの善に誇つて他人の悪のみ裁き、あるいは、自らの善に高あがりし、自らの悪に泣き、あるいは世をすね、人生を厭い、自暴自棄に陥つたりするのは、みな真実の教えを受け取る忠実な心が欠けているからであります。厳粛にして温かき我ならぬ者の声を聞かぬのであります。

厳粛にして温かき如来は、逃避、妥協、陶醉、眠りを許しませぬ。条件や、予定や、打算の不純を限りなく否定します。けれども大悲は如何なる罪濁の衆生をも棄てませぬ。愚禿とは如来に救われたる悪人愚者の名字であります。光明界に内観されたる衆生こそ、「罪悪生死の凡夫」であり、出離の縁あることなき業体であります。これこそ如来心の照し出したる自覚の相であります。

かくて我々は久遠の業障を一身に荷負せおいつつ、尊き知識の前にみ教えを聞き、み教えのままに充されて合掌するのであります。「親鸞せんげんにおきてはたゞ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よき人のおほせをかうぶりて信ずるほかに別の子細なきなり。」との絶対不可思議の信に生き得るのであります。

かくして苦楽すら超えて「念仏はまことに浄土に生るるたねにてやはんべらん、また地獄におつべき業にてやはんべらん、総じてもて存知せざるなり。」と両手を放して如来に生きる者のみ、真実の浄土へは召されるのであります。